慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シロテ著 十八世紀以降の英吉利対外貿易の変遷 : Werner Schlote, Entwicklung und Strukturwandlungen des englischen Aussenhandels von 1700 bis zur Gegenwart. Jena. 1938
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.1 (1939. 1) ,p.121(121)- 126(126)
JaLC DOI	10.14991/001.19390101-0121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390101-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一千五百八十一年版ダブルユー・エス・ヂェントルマン著
『種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる檢討』

家的規制益々强固ならんとする初期國民經濟時代の最重要なる經濟文獻の一として永く記憶せらるる可きものである。著者の思想の多くは中世的起源のものであるが、而もそは多く古典的知識を以つて潤色せられ、而して光彩ある商業革命期の精神に於いて表現せられてゐる。

シュロォテ著「十八世紀以降の英吉利對外貿易の變遷」

——Werner Schlote, Entwicklung und Strukturwandlungen des englischen Aussenhandels von 1700 bis zur Gegenwart. Jena. 1938.——

高村象平

何處の國の歷史でも、その國の人が研究すれば一番よいものが出來る筈であるが、然しこれと同時に、他の國民の手になるものも亦、着想その他に於いて當該國人の研究と違つたものが見出される點からして、有意義なものが甚だ多い。由來、英吉利の對外貿易に就いての英吉利人の勞作は決して尠しとしないが、その他方本書の如き獨逸人の研究書も亦顧みらるべき價値を十分に持つ。

扨て、本書はキィル大學附屬の世界經濟研究所の叢書の一である。その序文に說くところに據れば、本書は、經濟發展上に占める恐慌の意義を明かにし、且つ近代的景氣變動論を檢討する上に役立つべき資料を提供するに在ると云ふ。しかもこの爲めには、先づ經濟構造の變化と景氣變動との相互關係を明かにせねばならないが、これには比較的長期に亘つて資本主義經濟の發展を見ると共に、主要工業國の發展を研究するを要する。これには、諸國の對外貿易の變遷が好個の指標となる。然るにこれ等主要國の孰れも統計資料を完備して居ないので、これの比較的

多く存する英吉利を題材とし、その對外貿易と工業との發展及び變化を統計的に觀察して、以て前記の目的に應ぜんとするのである。從つて本書は、統一的な經濟史的著作ではない。それへの準備的研究書であり、本文百十頁、附錄七十頁を通じて收められた七十餘の統計表と十四の圖表の中から幾多の啓示を求むべき資料集である。

本文は二部に分たれ、前編に於いては、著者の利用せる貿易統計の吟味乃至研究方法の大綱が說かれ、後編には、著者が原資料から算出せる統計資料に基き、英吉利の對外貿易發展とその構成變化との分析が示されて居る。先づ著者が本書を十八世紀以後の研究を以てしたのは、商品種目別、地域別に作成された英吉利貿易統計が一六九六年に始るからに外ならない。然し一七五四年迄の資料は英蘭及びウェエルスだけのものであり、蘇蘭の貿易統計は翌五五年から、愛蘭のそれは一八〇〇年以降作成された狀態であつた。斯かる集計範圍の變化の外に、貿易統計の項目や算出基準も、數回に亙つて變更を見て居る。のみならず貿易統計の資料として利用された荷主の申告價格の如きは一應再吟味する必要があり、又官廳價格と實際價格との差異にも留意すると共に、高關稅時代の密輸入問題にも考慮を拂はねばならない。更に著者は、集計上の商品種目をブラッセル規約によつて統一することにした爲めに、一八九九年迄五種目に分類されて居た英吉利貿易統計の補整に多大の勞力を拂はねばならなかつたのであつた。

ところでシュロォテ氏は、後編に於ける具體的分析を、(一)英吉利對外貿易の發展、(二)その商品種目別構成、(三)その地域別構成の三章に分つて居るが、その孰れに於いても、結果は從來諸家によつて示されて居るものと隔絕したものではないやうである。然し個々に算出し直した統計數字には、注目すべきもの可成り在るやうに考へられる。これを一々擧げることはこの紹介文に於いて割愛せざるを得ないが、以下に私は、シュロォテ氏の指摘する大綱を祖述しよう。

先づ英吉利對外貿易の量的發展を概觀すると、一六九七—一七八三年に徐々に上向を示して居るが、戰時と平時と殆ど相半ばしたこの時代に於いて、その間可成りの變動はあつた。然し一方に於いて產業革命の進行、他方英吉利にとつてアメリカが外國市場と化したことにより、貿易は增加を續けた。その後ナポレオン戰爭の爲め、輸出入は停滯狀態に陷つたが、一八二五年頃から自由貿易の展開と共に、その對外貿易は再び發展し始めた。この加速的增加は一八六〇年迄續いたが、爾來この傾向は、歐・米の工業化によつて緩漫とならざるを得なくなつた（然し一八一六—一九一三年に輸入量は七倍、輸出量は十倍の增加である）。世界大戰は英吉利貿易に大影響を及ぼし、戰後は僅かに輸入に於いて大戰前の狀態を超えただけであつて（一九三三年）、輸出に於いては今尙戰前の數字に達しない。次いで著者は一八一四—一九三三年の對外貿易增加と輸出入價格關係とを見て、全體として英吉利は、輸入價格の相對的高價の下に、その必要輸入品に對して、それより多量の輸出品を以て支拂はねばならなかつたことを結論し、又一八〇五—一九三三年の貿易と國民取得との比較によつて、貿易が英吉利國民經濟の中に占める比重とその變化とを示し、更に一七〇〇—一九三三年の貿易指數と工業生產指數とを對比して居る。

著者は商品種目別に見た英吉利の對外貿易を、一九一三年を基準とする實際價格に換算して分析する。英吉利の輸入品が食料品及び原料を主とし、輸出が國產品輸出に於いても總輸出（再輸出を含む）に於いても、完成品によつてその大部分を占められて居ることは常識と云つてよいであらうが、然しこれを尙詳細に見れば、最近百三十年間の輸入に於いて、食料品・完成品の相對的增加と原料部分の相對的減退なる變化があり、他方原料輸出の相對的增加と完成品輸出の緩漫なる減退が生じて居る。前者の變化は主として一八四五—七五年に生じ、後者の完成品輸出の相對的減少は一八四〇年代以來これを見る。從つて英吉利貿易の構成變化を知る上からは、十九世紀中葉前後の研究

が特に必要となる譯けであらう。

扨て、英吉利の原料輸入の相對的減少は、主として食料品輸入の増加に基くものであつた。又原料輸入上注目すべき點は、特に大戰前と後とでは、原料輸入内部に於いて生産財原料と消費財原料との占める比率が變化して居ることである。例へば前者に於いて石油・生ゴム・銅・製紙原料等の輸入が増加し、後者にあつては織物原料は戰前の純輸入中四〇％を占めて居たのが、一二五―三〇％に低下して居る如きである。ところで右の食料品輸入の相對的増加は、一八四六―八〇年に生じて居るが、これは關税改革・自由貿易への移行を一因とし、一般の生活水準の向上を他因とするものであつた。又完成品輸入の相對的増加は一八六〇年に始るが、これも一には自由貿易への推移の影響が認められ、他には歐・米の工業化進行による競爭能力増加が作用して居る。そしてその輸入完成品も一八九〇年代以來は化學製品・機械・鐵製品・紙等の生産財が主要となつて來て居る。この他方に於いて、食料・原料の輸出乃至再輸出増加は、十九世紀末から明かとなつて居る。完成品の輸出は大部分消費財より成るも、その中で最も主要な織物類の輸出は、絶對的にも相對的にも減少し、これが英吉利國産完成品の輸出減退に多大の影響を及ぼして居るのであつた。これに對して前記の原料輸入の増加から示されるやうに、電氣・自動車・製紙工業等の新工業品の輸出が二十世紀初年以來始まつて居り、それ等は戰後にその増加傾向を著しくして居る。更に著者は、一八一五―一九三三年の工業生産と輸出との關係を檢して、以て謂ゆる恐慌輸出の現象を統計的に示して居る。

最後にシュロオテ氏は、英吉利對外貿易の地域的構成の變化を辿るのであるが、先づ諸大陸との貿易に於いて、十八世紀は歐・米兩大陸がその主對象となつて居り、そこには歐羅巴からの背反現象（特に輸入に於いて）乃至英吉利貿易のアメリカ化傾向が顯はとなつて來て居ることを數字を以て明かにする。これが十九世紀になると、その前半は統一的な計算基準を缺く爲め、變化は判然と解らないが、然し後半に於いては、歐・米兩大陸との輸出入共に少しく減退を生じて居る。これを輸出に見れば、英吉利總輸出の中、歐・米兩大陸は一八五四年に七五％、一九一三年に六三％、一九二七―二九年に五九％と減退を示し、これと同一年度の輸入に於いては七九％、七三％、七一％と減じて居る。この他方對阿弗利加輸出は十九世紀半ば以來約二倍となつて、一九二七―二九年には濠洲と同じく總輸出の一〇％を占め、亞細亞への輸出は總輸出の一二％が二〇％に増加した。次に先進工業國との貿易により、農業國が工業化する上に蒙る影響を知る一助として、十九世紀半ば以降工業化を開始した諸國と英吉利との貿易を檢する。但しこの際、この統計的結果を何等條件を附せずに一般化することは避けねばならないであらう。蓋し農業國の工業化と云つても、夫々の國情やその他の特殊事情が作用しこれを規定するのであるから、貿易關係が工業化の爲めの決定的要素とは云へないからである。

著書が本文の記述中最も多くの紙數を割いて居るのは、英吉利の對英帝國貿易である。これはブロック經濟の統計的吟味とも云へるが、本書が過去の貿易構成關係を知つて將來の經濟政策の一資料たらんとするにあると云ふ立前から、當然のことであつたとも做し得よう。既に十九世紀中葉に、英吉利の對農業國貿易の半ばは、その植民地との間に行はれて居り、それは又英吉利の貿易總額中、輸入に於いて二三％、輸出の三〇％、再輸出の一四％を占めて居た。この割合は大戰前迄殆ど變つて居ない。然るにその後二十年間に英吉利國産品輸出の四九％は英帝國諸地に向けられ（一九三六年）、輸入に於いても英帝國の占める割合は三九・一％に増加して居る（同年）。この變化は世界恐慌前既に存しては居たのであつたが、それが歴然とし出したのはかのオッタワ會議以後のことである。シュロオテ氏はこの一九三一年以後の増加を以て、英吉利貿易構成變化に基くものとし、その相互間（本國と帝國諸地と

の間）の貿易關係の密接化の條件は既に準備されて居たので、容易にこれが實現され得たと云ふ。そしてその所以を、一八六三―七一年に於ける輸出減退と七一―七七年の回復とに對比して論證する。

シュロオテ氏はこの最後の章に於いて、大戰前後の英吉利の對英帝國貿易を比較するに際し、戰後の英帝國が、戰前に比してその領域を擴大して居ることに留意すべきを特に强調する。即ち舊獨逸植民地の大部分、舊土古耳領の一部（パレスチナ）及びスダンが新たに歸屬して居る點、從つて今迄多く用ゐられて居た統計數字の訂正を要する點である。その訂正の結果は、本書一〇〇頁と一七二―三頁との兩統計表に示されて居るが、本國の貿易總額に占める英帝國の割合は幾らか減少する。然し前述の兩者間の密接化傾向には變りはない。尙この地域的變化と共に、英吉利の對植民地貿易の商品別關係も變つて來て居る。これは諸植民地の經濟發達の然らしめるところであるが、シュロオテ氏はこの點も亦、個々の植民地とその本國との貿易商品に就いて詳細に說いて居る。私はその中英領印度から本國向け輸出される原棉の數量、その價格、英吉利の棉花輸入總額に於いて占める比率等の數字を若干揭げて、以てこの紹介文を終る。本書は最初にも述べたやうに、統計資料集として意義を持つものである。即ち本書執筆の第一の目的の爲めの材料の蒐集が根幹を爲して居り、それ等（恐慌の意義乃至景氣變動論の檢討）の爲めの研究者の手引として役立つものと考へられるのである。著者が集計した數字は、キィルの世界經濟研究所の名に於いて信頼してよいものであらう。

	一八五四―五七年	一九一一―一三年	一九二七―二九年	一九三二―三四年
一五七二千ハンドレッドウエイト		五五七	七四六	九四四
一六四二千磅		一二二六	三八二六	三一五三
一八・七		二・六	五・五	八・〇

Limits of Land Settlement. A Report on Present-day Possibilities.

Prepared under the direction of Isaiah Bowman. New York, 1937.

小島榮次

特定地域の過去及び現在を研究して、將來その地域に分布すべき諸現象に就いての可能性を明かにすることは、他の諸方面の學者と共に地理學研究者にも課せられる一つの實用的任務である。殊に現在の人口が稀薄な地域從つてまた諸種社會現象の複雜多岐な分布を持たぬ地域や、或はまた人口が稠密であつても經濟的發展が著しく後れ自然的資源の開發が極めて不十分な地域に就いての斯かる研究に於いては、地理學的研究が先づ第一に必要である。蓋し人口が稠密で經濟的發展の高度に達した地域に於いては、そこに出來上つて居る經濟その他諸方面の生活が、大體に於いてその地域の自然的資源を十分利用しつゝある結果であるか、或は少くともそれ等資源を十分知悉して居る結果であると看做され得るのであり、從つてその地域に於ける社會現象の現狀に基いて或る程度まで將來の豫測を行ひ得る。然るに人口稀薄な地域や經濟的發展の後れた地域に於ける社會現象は斯かる性質を持たぬが故に、常に必ずその地域の自然的及び社會的要因を考究することから出發せねばならない。

地理學研究者にとつても、若し斯かる任務を十分に果し得るならば研究者として大なる喜びに相違ない。然し乍